

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

祭文の意趣は、神明の威風によって年中の災禍を払い、天下を太平にし、君は長寿を得、民を安穩とするというものである、と説明される。

牛祭の祭文 [テキスト 瞬間テキスト使用]

夫れ以れば、性を乾坤の気につけ、篠を陰陽の圃 r 保ち、Eを専 1.して 411XL え、慎を致して神を殖ひ、天尊四を知り、是非器失の祠 4 こ弁ふる、これ差戸、IJ 申明の広恵なり、抜に因って単微の幣帛を捧げて、敬みて以つて厚哩瀾神 1 こ奉上す、靈神の謬を蒙らざるべけんや、iiE 因て四番大 4al、一心の懇切を袖でて十抄の佐式を学び、万人の逸興を催すを以て自ら神明の法豪に備へ、諸衆心つ感嘆を威すをぶて、|吉に神の納受を匂らんと成り、然る間に柎槌頭 1 こ木 5a を戴き、蓋? 111 こ|日鼻高を爺げつけ、喊牛|こ何割 xt 置き、瘦馬 1 こ鉛を付けて瓊る右あり、踊るもあり、跳ね・もあり、偏に百鬼夜行に異ならず、如是等 c 振舞を j 誠て、摩耗羅神を敢祭し奉る事、偏 1 こ天下安穩、寺家安泰 7) ためなり、因て永く遠く拂ひ退くべきものなり、先 1 よ三面の僧坊の 11 こ忍び入りて、●取る錢盜 A め、循怪すわいふ 1 よいやふ子ども、4 こ 4J) なり物な 6 んとて明り障子打 1・る、恂なき法銅齋!も危くぞ獄ゆる、堵 u、あ尼履、帰辰、すはぶき、斤麵、』こつせふ、曙搔 L ここには尻癒、a かさ、つみかさ、あふみ栢、冬に向かへる大あかがり、始にひひいかひ病、鼻たり、おこり、心跳貝つちさ lj り、傳死病、しかのみならず、鐘鐙法幕?のかはづるみ、il 言仲人、いさかひ合の仲間口、貧苦界の人たけり、無能女の隣ありき、又||堂塔の植皮喰ひ&く大 91 唱め、聖藪破る大鼠、小鳥め、田の喘穿つ土豹、止四如き奴原|こ於て ciL 永く遠く&劇 |糶 i の国まで 4&ひ退くべきものなり、敬白謹上再拜、|呵

牛祭の祭文 [編集]

夫れ以れば、性を乾坤の氣にうけ、徳を陰陽の間に保ち、信を専にして仏に仕え、慎を致して神を敬ひ、天尊地卑の礼を知り、是非得失の科を弁ふる、これ偏へに神明の広恩なり。数に因つて単微の幣帛を捧げて、敬みて以つて摩訶羅神に奉上す。豈神の恩を蒙らざるべけんや。弦に因て四番大衆等、一心の懇切を袖でて十抄の儀式を学び、万人の逸興を催すを以て自ら神明の法楽に備へ、諸衆の感嘆を成すを以て、暗に神の納受を知らんと成り。然る間に柎槌頭に木冠を戴き、銀平足に旧鼻高を絡げつけ、緘牛に荷鞍を置き、瘦馬に鈴を付けて馳るもあり。踊るもあり。跳ねるもあり。偏に百鬼夜行に異ならず。如是等の振舞を以て、摩訶羅神を敬祭し奉る事、偏に天下安穩、寺家安泰のためなり。因て永く遠く拂ひ退くべきものなり。先は三面の僧坊の中に忍び入りて、物取る錢盗人め、奇怪すわいふはいやふ子ども、木木のなり物ならんとて明り障子打破る。骨なき法師頭も危くぞ覺ゆる。堵は、あだ腹、頓病、すはぶき、疔瘡、ようせふ、開風。ここには尻癒、蟲かさ、うみかさ、あふみ瘡、冬に向かへる大あかがり、竝にひひいかひ病、鼻たり、おこり、心地貝つちさはり、傳死病。しかのみならず、鐘鐙法華堂のかはづるみ、謔言仲人、いさかひ合の仲間口、貧苦界の入たけり、無能女の隣ありき、又は堂塔の植皮喰ひぬく大鳥小鳥め、聖藪破る大鼠、小鼠め、田の喘穿つ土豹、此の如き奴原に於ては、永く遠く根の国底の国まで払ひ退くべきものなり。敬白謹上再拜。[16]